

スケジュール

13日 [土]	11:00~ 夢は牛のお医者さん [86分]	13:00~ 女工哀歌 [86分] 上映後トーク 雨宮処凛さん (作家・活動家)	15:30~ 四川のうた [112分]	18:00~ 川の底から こんにちば [112分]
14日 [日]	11:00~ その場所に 女ありて [95分]	13:30~ 浮き雲 [96分]	16:00~ この自由な 世界で [96分] 上映前解説 古賀太 (日本大学芸術学部 映画学科教授)	18:30~ 故郷 [96分]
15日 [月]	11:00~ 赤線地帯 [86分]	13:30~ ある精肉店の はなし [108分]	15:45~ 遭難 フリーター [67分]	17:15~ サウダーチ [167分]
16日 [火]	11:00~ 会社物語 [99分]	13:30~ 夢は牛のお 医者さん [86分]	16:00~ その場所に 女ありて [95分]	18:30~ ドキュメント路上 [54分] ある機関助手 [37分] 上映後トーク 湯浅誠さん (社会活動家)
17日 [水]	11:00~ 四川のうた [112分]	13:30~ サウダーチ [167分]	16:50~ 浮き雲 [96分]	19:00~ 女工哀歌 [86分]
18日 [木]	11:00~ 川の底から こんにちば [112分]	13:30~ ドキュメント路上 [54分] ある機関助手 [37分]	16:00~ 会社物語 [99分]	18:30~ ある精肉店の はなし [108分] 上映後トーク 額縁あや監督
19日 [金]	11:00~ この自由な 世界で [96分]	13:30~ 赤線地帯 [86分]	16:00~ 故郷 [96分]	18:30~ 遭難 フリーター [67分]

この国で普通に働き、普通に生きることが困難になってもう20年近くが経過した。出会う相手すべてがライバルで互いを貶め合う生存競争に多くの人が疲弊している。プレカリアートたちを描く映画を通して、改めて生きることを問い返す試みに心から賛同します。
雨宮処凛(作家・活動家)

面白い試みの映画祭だと思います。学生の頃、確かに僕も「労働」に憧れがありました。それでも今は労働というものがよく分からないんです。自分が仕事をしている実感に対して、「労働」という言葉は遠すぎる。ひとつ確かなのは、本気で真剣に仕事している人の姿は素敵だということです。
石井裕也(映画監督)

労働とは何かという問いは、生きるとは何かに答えをだそうとする試み。労働はどうあるべきかを考えることは、この社会はどうあったらよいのかを考えること。そんな根源的な問いに答えようとした映画を観ながら、これからの自分と社会の未来を見つめ出す。名作は、私たちに考えることの意味を教えてくれます。映画祭に出かけてみましょう。きっとたくさんのヒントえられるはずです。
内山節(哲学者・立教大学教授)

工場で働いていたことがある。パソコン、ファクス、分厚いファイル、何だか世界と自分、労働と自分とが遠かった。いや、遠いではなく、薄い膜で隔てられていてすぐそばにあるのに触れられないような気分、不思議で不安で不穏だった。その膜のことを日々考えるうち、私はデビュー作となる小説を書き始めていた。労働との関係によって、人は初めて何かになる、のではないだろうか。
小山田浩子(作家)

今年で4回目となる日芸生企画の映画祭。去年「監督、映画は学べますか」で困ったと思ったら、今年は「働くとは何ですか」というさらに切実なテーマ。この先も映画祭を続けるのが怖くなった。ちなみに、従来の理論・評論コースから、今年から映像表現・理論コースという新コースの映画ビジネスゼミでこの映画祭を企画する。教師としては、彼らが将来いい仕事に就けますようにと祈るのみ。
古賀太(日本大学芸術学部映画学科教授)

働く姿は美しい？

ワーカーズ

はたらくを
考える7日間
WORKERS 2014

映画祭



ユーロスペース
EUROSPACE

2014.12.13[土]~12.19[金]

主催：日本大学芸術学部映画学科3年／映像表現・理論コース映画ビジネスゼミ、ユーロスペース
上映協力：岩波映像／ウッキー・プロダクション／KADOKAWA／シグロ／松竹／エスバース・サロウ／東風／東宝／ビターズ・エンド／やしほ映画社／ボレボレタイムス社／ユーロスペース／映像集団「空族」／PFF事務局
HP: <http://workers2014.com> / Twitter: @nichige_eigasai / Facebook: <https://www.facebook.com/nichigei.filmfes2014>

12.13[土]~12.19[金]

前売券：1回券=(一般・学生ともに)¥800／3回券=¥2,100
当日券：1回券=一般¥1,200・学生¥1,000／3回券=¥2,700

*前売券はご鑑賞当日、劇場窓口にて入場整理番号とお引換えください
*連日10:00よりその日ごとに整理番号の引換／当日券の販売を開始します
*やむをえない事情により作品及び上映時間が変更になる場合がございます

ユーロスペース
EUROSPACE
東京都渋谷区円山町1-5
KINOHAUS 3F
☎03-3461-0211



オシゴト今昔

今年で4回目を迎える日藝生企画の映画祭。

テーマは“働くということについて考える”。

みなさんは“プレカリアート”という言葉をご存知でしょうか？

フリーターや、パート、アルバイト、契約社員、派遣日雇い労働者、移住労働者、ニート、貧困に苦しむ自営業、農業者などの総称で90年代以降に使われるようになりました。近年の日本の労働環境の劣悪さはよく耳にしますが、特に“プレカリアート”をめぐる問題は目立つようになってきています。そんな現状は決して他人事ではありません。そういった色々な問題が取り巻く中で、私たちはなぜ働くのか？これから就活に入る3年生の今だからこそ、そして、そんな私たちと一緒にもう一度、映画が映し出す“働く”ということについて考え直してみませんか？

サウダーヂ

2011

監督：富田克也
日本／カラー／35mm／167分



山梨県甲府市、日系ブラジル人やタイ人などさまざまな外国人労働者たちが働く土木建築業。ヒップホップグループ“アーミービレッジ”のメンバーである猛（田我流）は、建設現場で多くの移民たちと共に働き始める……。長らく日本映画界で語られることのなかった土方や移民労働者たちの生活。1年かけて甲府市を調査し撮影に挑んだという富田監督の本作へのこだわりは必見だ。インディペンデント映画では異例の快挙、第64回ロカルノ映画祭で独立批評家連盟特別賞、また第33回仏・ナント三大陸で最優秀賞を受賞した衝撃の問題作。

遭難フリーター

2007

監督：岩淵弘樹
日本／カラー／ブルーレイ／67分



派遣社員としてキャノンの工場で働く若者が、自身のカメラで葛藤の日々を収めたドキュメンタリー。地元の東北を離れ、憧れの地であった東京に移り住んだ若者を待っていたのは、厳しい現実だった。監督は大学時代に映像を学び、本作でデビューした岩淵弘樹。プレカリアート運動の第一人者である雨宮処凛が、アドバイザーを務める。本当の派遣社員の問題とは何か？ もがきながらも、懸命に明日を掴もうとする監督の姿に心打たれる。2007年山形国際ドキュメンタリー映画祭招待作品。

夢は牛のお医者さん

2014

監督：時田美昭
日本／カラー／ブルーレイ／86分



新潟の小さな村の女の子が抱いた夢は、「獣医になりたい」。小学校に入学してきた3頭の子牛たちとの出会い、別れ。獣医になるために難関大学への受験。家族や教師周囲の人たちからの支え。獣医になるという夢を抱いた少女と、家畜の獣医の1人として働く姿を、TeNYテレビ新潟が26年の歳月をかけて追ったドキュメンタリー。山田洋次監督が「ここに登場する人たちは、日本人の鏡」と評した、「夢」と「働く」ということをストレートに問いかける力強い作品。「働く」という言葉が孕む無味乾燥なイメージを払拭する情熱に思わず涙が溢れる。

ドキュメント 路上

1964

監督：土本典昭
日本／モノクロ／35mm／54分



高度経済成長期。オリンピックを控えて都市整備の工事が進み、道路事情が悪化した東京はまさに“交通戦争”時代。交通安全のPR映画として警視庁から企画されるが、土本監督は、ドライバーに安全を訴える前に交通戦争の元凶は都市そのものだと思っていてやろうと、過酷なタクシー運転手の実態を追う。ナレーションや音楽に頼らず、実験的な映像で勝負するも、封印されてしまった賛否両論の問題作。また、鈴木達夫の斬新なカメラワークにも圧巻させられる。第19回文部省芸術祭奨励賞・ヴェネツィア国際映画祭特別審査員賞を受賞。

ある機関助手

1963

監督：土本典昭
フィルム提供：岩波映像
日本／カラー／16mm／37分



1962年の三河島での鉄道事故の後、鉄道の安全性を伝えるために国鉄当局が企画し、制作された作品。上野から水戸まで蒸気機関車を運転する機関助手の一日を追い、その安全性を担う鉄道員の労働の過酷さが浮き彫りとなる。作中に登場する機関車は、実際の定期運行された旅客列車ではなく、撮影のために機関車を運行し、綿密な脚本によって制作された。代表作『水俣-患者さんとその世界』で知られる記録映画作家、土本典昭監督の映画デビュー作。第18回文部省芸術祭文部大臣賞受賞。キネマ旬報短編ベストテン第1位。

ある精肉店の はなし

2013

監督：綱織あや
日本／カラー／ブルーレイ／108分



牛の飼育から、屠畜までを行う家族経営の精肉店に密着したドキュメンタリー。映しだされているのは仕事に対する家族のひたむきさと、いのちに向き合う力強い生き方。心に強く響くのは、牛を捌く無駄のない動き、祭りに響くだんじり太鼓の音、そしてあたたかな家族の笑顔。いわれない部落差別を乗り越えて、江戸時代から7代続いてきた最後の屠畜までを追う。いのちをいただく、その仕事の意味に、いのちの眩しさに息を呑む。釜山国際映画祭ワイドアングル部門正式出品作品。第87回キネマ旬報文化映画ベスト・テン第2位。

川の底からこんにちは

2010

監督：石井裕也
日本／カラー／35mm／112分



『舟を編む』などで知られる、石井裕也監督が「人間の魅力だったり、愛おしさ、醜さや滑稽さっていうのは表裏一体のもの」と語った、商業映画デビュー作品。仕事も恋人も、これまでの人生すべてが妥協。でもそんなある日、人生の転機が訪れたら？ 東京でOLとして働く佐和子（満島ひかり）は、父の入院を知らされ、急ぎよ田舎で家業のしじみ工場を継ぐ事になる。言う事を聞かない従業員のおばちゃんたちに、倒産寸前の経営。こうなったらもう、開き直るしかない！ 2010年 モントリオールファンタジア国際映画祭最優秀作品賞受賞作品。

その場所に女ありて

1962

監督：鈴木英夫
日本／カラー／35mm／95分



90年代の再評価でその名を知られた鈴木英夫が、広告代理店で働く女の遅しさを描く。60年代東宝の看板女優、司葉子演じる主人公は野心渦巻く社会の荒波をくぐり抜けてきた、凛とした女性。ライバル社の男と恋に落ちるも、その恋はぶれない。1962年、まだまだ男性の場所であった会社において、女だからといって遠慮などせず働く姿に惚れ惚れする。挫折を知り、遅しく働く女性は、強さと美しさを合わせ持つ。労働は決して男性だけのものではない。そこには必ず「女」がある。1963年サンパウロ国際映画祭で審査委員特別賞受賞。

赤線地帯

1956

監督：溝口健二
日本／モノクロ／35mm／86分



「赤線地帯」というのは半ば公認で売春が行われていた実際にあった地域のこと。本作はそこで生きざるを負えない女性たちの群像劇を描いた溝口健二の遺作。売春禁止法案に対し、彼女たち一人一人は自分の職業にどう向かい合うのか。娼婦だからといって決してダークな作風ではない。娼婦として生きる彼女たちの悲命な姿は、現代に通ずる希望あふれる作品といっていだろう。また、京マチ子、若尾文子など往年の女優たちの輝かしい姿も見ものだ。『職に貴賤なし』。世間の汎論に抗いながら、ここでも女はただ、生きるために働く。

四川のうた

2008

監督：ジャ・ジャンクー
中国・日本／カラー／35mm／112分



巨匠ジャ・ジャンクーが実話を元に、四人の俳優とかつての工場労働者を起用したセ・ドキュメンタリー。四川省・成都。中国の盛衰を象徴する国営工場が50年の歴史に幕を降ろし、工場の労働者たちとその家族は各々の思いを語る。ジャ・ジャンクーは「歴史とは常に『事実』と『想像』の混合物だ」と述べ、今作で経済成長の最中にある中国社会を見つめようと試みた。集団主義という名の激流に埋もれていた労働者たちの声から生活と労働の強固な関係性に気付かされる。2008年カンヌ国際映画祭コンペティション部門正式上映作品。

女工哀歌

2005

監督：ミカ・X・ベレド
アメリカ／カラー／ブルーレイ／88分



私たちの生活にごく身近な「中国製」の物。ジーンズ工場で働く10代の少女達を追った本作からは大量生産、低価格というメリットの裏に潜む深刻な労働問題が浮き彫りになる。「世界の工場」となった中国から見るグローバリゼーションや多国籍企業の問題、過酷な生活環境の中にも夢を持って生きる少女達を見事に捉えた現代のプロレタリア映画。私たちが何気なく履いているジーンズの小さなポケットにも労働問題は潜んでいる。アムステルダム国際ドキュメンタリー映画祭にてアムネスティ・ビュ-human・ライツ・アワードを受賞。

会社物語 MEMORIES OF YOU

1988

監督：市川準
日本／カラー／35mm／103分



1988年に公開されたハナ肇主演映画。コメディーにも多く出演しているが、その役とはうってかわって、漂う哀愁がなんとも素晴らしい。定年を間近に控えたごく普通の冴えないサラリーマン花岡始は、退職前に社内でジャズバンドを結成する。一家を支える大黒柱の地味でありながら莫大な苦勞をリアルに描く、大人の青春作品。「ただ、真面目に無難に仕事をこなすこと」に果たして幸福は見出せるのか、という誰もが持ち得る疑問を市川準が描く。主演のハナ肇は本作で第31回ブルーボン賞・第43回毎日映画コンクール主演男優賞を受賞。

故郷

1972

監督：山田洋次
日本／カラー／35mm／96分



『家族』（1970）、『遙かなる山の呼び声』（1980）と共に、民子三部作の第二作品。瀬戸内海に位置する倉橋島に住む一家は、石船と呼ばれる小さくて古い砂利運搬船で生計を立てていた。しかし、船のエンジンの調子はおもわしくなく、高度経済成長の波にも呑み込まれてしまう。果たして家族はこの荒波をどう切り抜けるのか。時代の流れという「大きなもの」に打ちのめされ、嘆く姿に働くことの厳しさを痛感させられる。家族の絆を描く、監督得意の人情劇。第46回キネマ旬報ベスト・テン第3位。監督の山田洋次は映画公開の同年に菊池寛賞を受賞。

この自由な世界で

2007

監督：ケン・ローチ
イギリス／カラー／35mm／96分



アンジーは職業紹介会社で働くシングルマザー。しかし勝ち気な性格が災いし、職を与える立場から一転、自身も無職になってしまう。あるのは限度額を超えたカードと、借金だけ。そんな彼女は自ら職業紹介所を立ち上げるが、やがて欲に目が眩み、事態は取り返しのつかない方向へと転がり出す。日本の現状とオーバーラップし、行く末を予期させるような社会派作品。搾取する人間と弱い労働者。誰かの不幸の上に成り立つ幸福。自由とそれに伴う責任について、考えずにはいられない。第64回ヴェネチア国際映画祭で脚本賞の金オッセラ賞受賞。

浮き雲

1997

監督：アキ・カウリスマキ
フィンランド／カラー／35mm／96分



レストランの給仕長として働く妻・イロナと、市電の運転士の夫・ラウリ。慎ましくも幸せに暮らしていた二人は、同時期に仕事を失ってしまう。予期せぬ失業と見つからない再就職先。そして、失業と共に立ちこめた厚い雲の隙間から降り立った一筋の光。二人はどんな道を選ぶのか？ すべてを失いかけた二人が見つけた希望とは？ カウリスマキ監督「敗者三部作」の一作品。フィンランドが抱えていた深刻な失業問題を背景に生まれたこの作品は、現代日本に重なる。第49回カンヌ国際映画祭コンペティション部門出品作品。